

Title	唐鏡背文に見えたる西方の意匠
Sub Title	
Author	原田, 淑人(Harada, Yoshito)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.1 (1925. 2) ,p.1- 8
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250200-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250200-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 史

# 學

## 第四卷

## 第壹號

大正十四年二月

### 唐鏡背文に見わたる西方の意匠

唐代支那の藝術品に波斯、印度、ビザンツ等西方諸國の要素の加はつてゐることは、種々の方面から看取することが出来る。特に織物の文様には著るしい痕跡を認め得るのである。此の事に就いては、伊東工學博士（考古學雜誌第三卷第三號五號六號所載奈良模様の起源に就いて）O. Falke氏（Kunstgeschichte des Sedelenweberei I. S. S. 77—91）等の夙に唱道するところである。余輩は今唐鏡の背文に於ける西方的意匠を觀察して見やう。

織物の圖紋が多く文様であるに比して、鏡鑑の背文が繪畫の性質を帯びて居るのは、その圖紋の施されてゐる物件の彼此殊なるに歸着すること勿論である。

唐鏡背文に見えたる西方の意匠（原田）

(一)

一

唐鏡背文の圖様にはその種類決して少くない。余輩は茲には唯葡萄文鏡、狩獵文鏡、鳥獸相對文鏡、月兔鏡の四者を選んで述べたいと思ふ。

## 一、葡萄文鏡

葡萄文鏡に關しては、從來大に議論のあることで、殊にその作られた時代に對して多くの支那人は漢だといふてゐる。博古圖錄、金索西清古鑑等何れも之を漢鏡として取り扱つてゐる。獨逸の HEINE 教授も之を信じて、漢代葡萄の傳來と共に葡萄文様まで來漸したのであると論せられてゐることは、學界周知のことである。然しながら、その圖紋の様式から見ても、文献上の檢索から考へても、その漢鏡でないことは明白な事實であつて、先輩も已に論じて居られるし、余輩も嘗て史學雜誌第二十八編第一號に海獸葡萄鏡に就いてといふ題下に論證したことがあるから、今更らながら同一事項を反復することを避けたい。唯當時余輩は葡萄と鳥獸とを取り合せた所謂海獸葡萄鏡の成立を説いて、葡萄文と四神十二支生肖圖象及び四獸六獸圖象とが六朝末から盛唐にかけて、支那で混和融合されて優麗な特種の圖様と成つたものとした。畏反濱田博士は余輩の説を一部是認されると同時に、西洋學者の諸説并に遺品の類例を擧げて、葡萄文が西方から支那に入る時已に鳥獸を附隨した意匠をも移入したと見るのが穩當であると論せられた。(國華第三十編第七冊) 余輩はその後、同圖紋に注意を拂つて居たが、西遊中、歐米各地

の博物館に收藏されてゐるサツサンやビザンツ等の圖紋を實見して濱田博士の高説に敬服するに至つたのである。幸に本誌を借りて余輩前説の缺を補ふことゝする。

葡萄の圖象は埃及やアッシリヤにもあるが、流麗な文様として已に希臘に行はれてゐる。余輩は伯林アルテス博物館所藏の前二世紀頃の製作にかゝる青銅瓶を見た。瓶は高二六糎、腹部全面に銀と銅とで狩獵の圖を象嵌してゐる。そして、瓶の頸部に葡萄文を刻してゐる。葡萄の圖様は、その葉といひ、その實といひ、余輩が史學雜誌第二十八編第一號の卷頭に、第一圖として掲げた葡萄鏡と酷似してゐる。殊に葡萄文の上下に唐草文帶を環らしたやり口も同一意匠に出でゝゐる。此の瓶は出土地不明であるが、前二世紀ヘレネスチックのものと考定される。然し葡萄文の支那への直接輸入を爲したものは、サツサン朝のペルシャあたりであらう。ペテルブルクの博物館にサツサンヘレネスチックの銀の皿がある。(F. Sarre: Die Kunst des alten Persien 124) 皿の内面の中央に女神と鹿とを置き、葡萄蔓で之を廻らし、更にその外區を葡萄蔓で八個の圈に分け、全面に蔓から葡萄の實と葉とを出して間地を充たし、而して、その間に鹿兎鳥などの動物を入れてゐる。又皿の縁には同じく種々な鳥獸を葡萄の中に配列して繞らされてゐる。(第一圖) 之を第二圖香取神宮所傳葡萄鏡と比べると、明かに唐代の葡萄鏡の意匠の本源たることを示してゐる。又葡萄文はビザンツに大に流行して寺院の建築裝飾にも用ひられてゐる。余輩は希臘アゼンスにあるビザンツの古寺小メトロポリスの玄關内入口に葡萄に鳥を配してある圖象を

見、又同地大學附屬の宗教博物館に、希臘のテッサリ等から運んだビザンツ建築物の彫石片に同種の葡萄文様が多くあるのを見たが、中には兎が葡萄を食てゐるものなどもあつて、興味深く感じたのである。

その他各地の博物館で此種のものを見た。その他羅馬時代の褐色で押型模様の所謂サミヤン陶器の模様にも認められ、余輩もその斷片を入手したのである。

一 以上の見聞によつて、余輩は葡萄鏡の意匠が波斯やビザンツ等から來たものであることを是認すると同時に、支那に入つて更に六朝末唐初の四神十二生肖鏡四獸鏡六獸鏡などの圖象と混和融合したものであることを信ずるに至つたのである。

## 二、狩獵文鏡

狩獵の圖象は原始的藝術品にも現はれてゐるが、アッシリヤの遺物に最多く之を見るのである。チゲリスユーフラテス兩河地方は古代から現時（少くとも十九世紀の中頃）まで鳥獸の生息地として有名で



あつて、スメル人やバビロン人の遺物にも狩獵の圖象が少くない。アッシリヤ人は最多くその圖象を殘してゐる。同一地方に起つた以後の國々にも同様の圖象が多いのは勿論である。(B. Meissner: Assyrische

Jagen. Der alte Orient 13 Jahrgang; Heft 2 參



照)而して、希臘などにも及んだことは前記の青銅瓶の圖様に於ても認められる。サツサン式圖様を多く移入してゐる唐代の鏡鑑背文に狩獵文の施されてゐるのは當然の事である。然し古來その數が餘り多くないと見えて圖録されて居るものが殆どない。然るに近年我邦に數回渡來し、米國にも二三存在してゐる。織物の圖象には法隆寺傳來の所謂四天王紋旗の系統の狩獵文がペルシャやビザンツにあつて、それが東西に擴がつてゐる。それ等の關係は、先輩の説き盡くされてゐるところで

ある。唐鏡の圖象になると、織物とは聊意匠の異なるものがある。第四圖は畫家長野草風氏珍藏の唐鏡で、鈕を廻り騎士二人、一人は半弓を引き、一人は槍を横へ、馬を走らし野猪と山羊とを追驅する状を

現はし、間地に花草を配してゐる。他の狩獵文鏡の圖様も同巧異局で、中には、騎士三人居るのもある。第



三圖は大英博物館所藏の三四世紀頃の製作にかゝる、印度バクトリヤ式銀製鉢で、印度

度西北部出土である。(Sarre. 114, 115.)

これには器の外面に騎士四人、二人は半弓、

第二人は槍で獅子野猪山羊を狩りしてゐて、

間地に樹草を配してゐる。前記唐鏡の文様

三と同意匠であることは、一見點頭かれる。

なほ狩獵文様の系統に就いては、他日別に

圖稿を改めて考説して見る積りである。

### 三、鳥獸相對文鏡

鳥獸を左右均勢に配列する意匠は、必しもその起源を一にするとはいひ兼ねるが、メ

ソポタミヤ地方には古くからその意匠が存在する。例ば大英博物館に收藏されるアッシリヤ石刻の神人

天使等の衣服の裝飾に、樹木花草等を隔て、天使有翼馬山羊鵝鳥等が均勢的に配置されてゐるのが多い。その系統を牽いて優雅な鳥獸文を作り出したのは、サッサン及びビザンツである。織物の圖様のこ



第 四 圖

とは茲には省略するが、器物に現はれるものゝ一例を舉げると、ペテルブルグにあるストロガノフ收集品中の銀の皿 (Sarre. 114) の内面にある圖象である。これには樹木を隔て、山羊を相對立せしめてゐる。之と同意匠で對隣の圖象ある唐鏡が一面西清古鑑に出てゐる。その他所謂雙鷹雙鵝等の圖紋の如き、波斯式織物圖紋と比較すれば、その同一系統たることは明かである。

#### 四、月 兔 文 鏡

サッサン式圖様には、中央に樹木を置いて、その左右に均勢的に鳥獸を配列することの存することは前述の如くであるが、均勢の地位に配列する代りに、樹下に人物や鳥獸を立たしめることもある。例へば前記の葡萄模様の銀の皿と同一博物館の所藏で銀の皿の内面に樹下に獅子一匹を立たしめてゐるのが



ある。六七世紀頃のサッサン後期に屬するものである。(Sartre, 122) 正倉院御物中の膳額屏風の一扇に樹下に象を配してゐるものと、鳥を置いてゐるのがある。之と第五圖との間に連絡のあることは明かである。彼の御物樹下美人屏風や、新疆發見の樹下美人圖(西域考古圖譜上卷)などの構圖も同様であらう。唐鏡背文に中央に桂樹を立て、左右に嫦娥と兎又は兎蟾蜍を配してゐるものがある。住友家所藏の鏡の中にその一例がある。(泉屋清賞鏡鑑部第二) この場合鏡の鈕が全構圖の上に支障となる。そこで月兎鏡の場合には、鈕を木節として、此の支障を避けてゐる。然し鈕の中央に隆起してゐる以上、樹下美人式の構圖は鏡背の文様としては思はしくない。従つて鳥獸均勢圖様の方が多く採られるのは當然である。要するに、サッサンやビザンツその他の西方諸國の器物の上に現はれた圖様が、支那化されて唐鏡の上に施されてゐることは、恰も西方の織物文様が、唐のそれに優美化されて現はれると同一現象であることは拒み難いのである。

原 田 淑 人